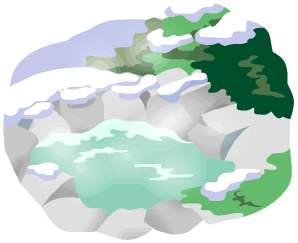

説教要旨「確かに種は蒔かれた」

ルカによる福音書　８章　４～１５節

　種を蒔く人が種を蒔いて、道ばたに落ちた種は踏みつけられ鳥に食べられ、石地に落ちた種は枯れてしまい、茨の中に落ちた種は茨に覆われてうまく育たない。それでも良い土地に落ちた種は百倍もの実を結んだ…イエス様はこのようなたとえ話をされました。弟子たちはこのたとえが何を意味しているのかよく分からなかったみたいで、たとえの意味をイエス様に尋ねています。

　イエス様はこのあと、神の国を宣べ伝えるものとして十二弟子たちを町々へと送り出されます（ルカ９書１節以下）。このたとえ話を、弟子たちを送り出すにあたっての教えだと理解するならば、弟子たちの置かれている立場は『種を蒔く人』です。蒔いた種が全てが全て、順調に育って実を結ぶ訳ではありません。同じように、人々に福音を伝えていくなかで、うまくいかないこともあるでしょう。いやむしろうまくいかないことばかりだったかも知れません。けれども、あなたがたが蒔く福音の種が、たった１人にでも根付いたなら、豊かに、１００倍もの実を結ぶのだ。そういってイエス様は、弟子たちを励まされているのです。

　わたしたちは、自分自身が“良い地”だなどとはとうてい思えません。自分のことを客観的に見つめるなら、自分が道端や石地や茨の中のような者であることを認めざるを得ないのです。しかし、そのような私たちにも種は蒔かれたのです。その種を立派に生長させて、たくさんの実を結ばせているのかどうか別として、確かに種は蒔かれているのです。もし、この種まき人が、良い土地にしか種を蒔かなかったとしたらどうでしょうか。きっとわたしたちにはこの福音の種は蒔かれていなかったことでしょう。けれども、そんなわたしたちにも、この種は蒔かれたのです。

　み言葉を全く受け入れようとしなかったり、一旦受け入れても試練によってそれが枯れてしまったり、人生の思い煩いや富や快楽に塞がれてしまう、そのようなわたしたちの罪を全て背負って、イエス様は十字架にかかって死んで下さったのです。

（２０２３・２・５　説教者：稲垣真実）